

婦人の幸福

海老名 彈正

婦人の生涯は通常三つに分けます、娘の生涯、妻の生涯、母の生涯の此三つであります、娘の時代の幸福は其生れた家庭に負ふ所が多いものであります、其父母がよく教育をして呉れたのと呉れないのとでは大變な違ひです、ですから早くから父や又は母を失つた女子は、比較的男子よりも多くの不幸を感じるでありません、けれども今は茲に女子の不幸を論ずるのではないから只両親を持つて居る女子の幸福に付て申しませう、

娘として幸福を得る心得はいろ／＼言ふ必要があるけれども先づ自分の両親に柔順なる事が大切である、父母たるものが特に悪いとか又常識を外れた様な行爲がある場合は特別であるけれども、之は例外であつて一般に父母は其子に對しては最も賢く又最も親切であつて、總べての點に於て、

子の模範となる事は自然の順序であるからして、其子たるものが父母に柔順なる事は幸福の生涯を送る道となるのです、稍々生長して考へだん／＼發達し、獨立の考も立つといふ時に、又は學校で勉學するのめだん／＼進んで、所謂年頃になると自分の事ばかりでなく、生涯の事をも考へなければならぬが、こゝに婚姻といふ大問題が起る、之は決して輕々しく決してはなりません、若し之を輕々しく決するやうな事をする、また結婚の式も濟まないうちに取り返しのない不幸に陥るでせう、如何に分別がつき、獨立の考があつても生涯の半身の問題を定める見識と能力とはまだ中々としても父母の智慧には及ばないものです、ですから順序からいつて此事は父母に任せる方が幸福です、それに父母としても父母の意見ばかりで決するといふ事はない必ず自分の承諾も求めるのであるから、自分は只自分の考をいつて父母の参考に供するがよろしい、若し誤つて自分の考で極め

てしまつた時に父母の意見と衝突する様な事でも
 あると緩い脳髓と柔らかい心臓とを持つてゐる婦
 女子は殆んど堪へられない板挟みに逢はなければ
 ならない、幸に其の決したといふ相手が適當な人
 であつても父母と衝突するといふ事は最も厭ふべ
 き事でありませぬ、又其人がもし見誤つたなら父母
 の心々傷けた上に殆んど救ふ事の出来ない煩悶に
 陥るでせう、そうなるに只徒らに世を果なんでも
 鐵砲に何所へでも一身を放棄してしまふような自
 暴自棄に終るようになる、この絶望は實に若い女
 には恐るべき不幸であります、だから此大問題は
 父母に任せて自分では只之に賛同する方が得策で
 す、尤も今代では父母の資格と子供の教育とが非
 常に懸けはなれてゐるといふ憂があるのです、往々
 不幸にして此大問題を衝突する事があります、
 父母は古風を貴び娘は新潮を酌むといふ具合でそ
 こに困つた事になるのですが併し之は例外です
 から茲には申しませぬ、常道としてはこんな大問

題は父母に任せて自分は只之に賛成して最後の決
 心をした方が幸福であります、
 妻としての女子の幸福は言ふまでもなく其配偶即
 ち夫其人の如何に存するのであつて、如何に配偶
 に注意すべきかといふ事は妻となつて初めて心付
 く事である、そこで妻としての女子の幸福を考へ
 るには、勢配偶者たる夫の撰び方に注意しなければ
 なりません、娘の後見者たる寧ろ其保護者の父
 母たる者が娘に一生の幸福を得させると否とは夫
 の宜しきを得ると否とによるものである、故に父
 母の責任も亦實に大なるものである、それならば
 如何なるものを最も適當なものとするかといふに
 先づ其人人物の良否を問ふべき事は勿論でせう、種
 々の條件に拘泥しないで、又種類とか同僚縁邊の
 爲めに束縛せられずに只當人の人物如何に着目す
 る事が第一です併し又第二に注意すべきは釣合と
 いふ事です、如何に當人の人物がよくても彼此の
 教育の程度が餘りに違つて居る様では幸福は得ら

れません、よく世間で馬は馬づれ牛は牛づれといひますが、大抵似よつた者を撰ぶがよいです、其夫には非常に哲學的の學識や趣味があるのに妻にはそれが皆無であるとか又夫には非常に文學的の趣味があるのに妻にはそれがないと、いふ様な場合又夫は天下の大學者であるのに妻には教育がないとかいふ様な時には到底幸福は得られません、であるから又若し女子が平凡である場合には決して豪傑を撰んではならない、豪傑を好むといふ事は自然である、えらい人の妻になりたいといふ事は自然の人情ではありますけれども之はよく考へなければなりません、自分が平凡でもえらい人の妻になれば非常な名譽である様に一寸思はれるのであります、之は決して幸福な事ではありません、後で苦痛を感じる事は決して少ない例ではありません、又夫の家と自分の家との貧富の差異や貴賤の相違などは餘り意とするに足らない様ではあります、之とても大に考へべき事です、貧家の女子

が富者の妻となる事は一寸幸福の様に見えますが又一寸自分の面目の様に見えますが實際は決して幸福ではありません、人は決して孤立して居るものではありません、父母もあれば兄弟もあり、親戚もあります、之等との交はりから受ける幸福を捨て、富家に嫁す女子は實に人生の大部分を捨てたものであります、婚姻によりて在來の幸福を増す様にしなければならぬ、それには親族みなうちよつて之を全うしなければならぬでせう、貧なる自分の實父實母が富める夫の家の表玄關から出入する事が出来ないで又は中玄關より出入する事すらも出来ないで勝手口から出入するとかいふ様な風では其子たる妻が決して快い筈はないです、必ず心中には寂寥を感じ耻辱を覺えるに相違ありません、之は非常な苦痛であります、要するに女子は夫を撰ぶに當つては最も注意しなければならぬ、愛は勿論夫婦の根本でありますけれども、之に伴うて總べての事情が揃うて居なければ

幸福を全うする事は困難です、若し幸にして極め
 適當な人を得て夫としたならば實に女子の幸福
 といふものはちやんと定つたものであります、
 故に只すぐれた夫を得んとのみ考へずに自分もす
 ぐれた女徳を養ふ様にしなければなりません、そ
 こに注意しない女は實に不幸です、故によき夫を
 撰ぶ所のものは第一に自分の善良、柔順、淑徳あ
 る女子たらん事を勉めなければなりません、
 母としての女子の幸福、之は妻としての幸福から
 生み出さるゝものであります、妻としての幸福に
 缺くる所の者はまゝ母としての幸福に於ても亦缺
 けるものです、何故といふに若し其の息子たり娘
 たるものがあまりに不釣合な時にはそこに一種の
 苦痛を實驗するに違ありませぬ、何となれば其子
 女の意見と母の意見とが衝突するのであります、
 母が娘に一から十まで従ふといふことはできな
 い、其子女が天稟あまりに親に勝つてをると其行
 動が母の行動と釣合がとれない所から、まゝ雌雞

が家鴨の卵をかへした様な不幸を見るものです、
 其卵がかへつて雛が生れたときに初めは愉快に育
 て、居ますが、だん／＼育つて其が水に浮ばうと
 する時に母がいかに心をなやませても、仕方があ
 りませぬ、元來其の雛が水に浮ぶのは其雛にとつ
 ては何の危険もないのであります、それを其雌雞
 が岸にゐて苦痛煩悶してゐる様は見人をして實
 に氣の毒に思はせるものであります、かういふ母
 は決して世に少なくはありませぬ、であるから其
 子の意見行動と歩調の揃はぬといふ事は母にとつ
 て決して幸福な事ではありませぬ、次に母として
 の女子の幸福は其子の生長如何によります、之が
 其所を得ずして其子女の人格に大なる損害を作る
 やうな事があると母の不幸は之にこすものはあり
 ませぬ、故に母としての幸福は其子女の生長の最
 も完全ならん事に存じてゐるのです、ですから幼
 少から青年となり又獨立するに至るまで母たる者
 は其智育情育意育及躰育に付て十二分に力を盡す

大責任があるのです、第三に母としての女子の幸福は其子女が獨立的生活をするに到達した所をよく認めて、其人物相應に之に自由を與うる事であり、どんな子女でも一箇の見識が定まり分別がついてくると一から十までさう母の意見にばかり従つて居るものでありません、又それを望むべきではありません、子には又子相當の見識、考があるのですから母は之に教へると同時に又之から學ぶといふ心掛がなければなりません時代は船の走るが如くに常に走りつゝある者ですから年老いたものが只過去にのみ生活して居つては到底時代と一致する事はできません、子女が新時代に生きたる母は昔の時代に生きてゐるといふ風では母子の間に新舊の衝突は免れません、茲は母たるものが顧みるべき所であり、其子は如何に母を想ふ事が切であつても餘りに思想がかけはなれてゐるときは、母の温情に對してもうるさく感ずるものであります、又愚痴に思ふのであります、故に

六
母たるものは時代の變遷に心がけて新しい、生活を旨とすべきであります、さうすれば彼と此とが相携へる事ができ母は子女に教へ又學ぶ事ができるでせう、尙ほ一つ注意すべきは其子女を信任する事です、其子女をして獨立の思想を全うせしめ其意見を尊重する事です、之は晩年になつての母の幸福として必要な條件です、女子は大抵他に嫁すものですが男子は家にあつて妻を娶るのです、こゝが又母の不幸の岐れる所です、一番いゝのは分家することです、新夫婦と舊夫婦の生活を別にする事です、之は兩方のものに幸です、いかに其母が新時代の思想を研究しても少しは舊時代の考が残つて居ります故に其の衝突は子女の結婚後にある事が多い、それは風俗習慣との新分子が入つてくるからです、新らしき教育を受けたいのに我が舊來の家風に悉く従はせるといふことは望むべきことでありません、見識あり獨立の考ある女子は悉く之に従ふものではありません、

例合従ふとしてもいや／＼に従ふのであつて決して喜んでする事はありませぬ、さてやがて新夫婦の間に子が生れるといふとまたむづかしい事が起る、其子は一方よりは孫又一方よりは子でありましてこゝに新舊の衝突が生じます、老人は不平をいふか、又子の方では老人を思ひ遣つて其子を全く老人にくれてしまいます、之は世間まゝあるとであるが尤も厭ふべきことであります、祖母に育てられた子は將來其父母に氣に喰はぬ者であります、舊の思想の感化が多いからです、そこで又子の方でも父母をいやがり之を恐れ自ら煩悶して家を苦痛な所として老人としても爲に不幸を感じざる事になる、だから最もいゝのは分家でありますもし分家をしなないならばそこは老たる老母の心得として孫の教育は全く新夫婦に任して、手傳ができればする位にして全く諦めるがよろしい、こうすれば老父母の幸福は疑ない、要するに女子の幸福は三時期に於て必ずしも同じ

ではない、如何によい父母の家庭に育つて幸福に愉快に生長しても若し結婚の一條を誤る時は半生は不幸に終つてしまふ、其結婚に於て更に満足な點がなくつても其子供を育てる上に其宜しきを得なければ又其獨立の時期に其處置がよくないと老後の不幸を見るやうになるでせう、女子も男子も同じとであるが幼少の時から此世を去るまで一つの志を抱いて修養し少しでも完全なものになりたいといふ心掛がなければなりません、さて又事に當り物に應じて時と場合とに従つて相應の新しい見識を開いて修養をつみ人生を送らうとする心掛と其行があつたならば災を變じて幸とする事もできるでせう、況んやそれが既に幸福の境涯であるならば更に幸福の生涯を送る事ができるでせう、

